

人類の進化と男女共同参画

Human Evolution and Gender Equality

高木 誠 Makoto TAKAGI

私の専門は人類学でも何でも無い。しかし人の進化やその社会変化が過去どうであったか、あるいは今後どうなるのか等を、最近の話題をかじりながらあれこれ無責任に想像するのは楽しい。それは、自分では書けも描けもしない詩歌や絵画をとにかく言うのに似ている。素人の特権であろう。

1年ほど前、440万年前のラミダス猿人に関する論文がサイエンス誌に発表され、極初期の人類の進化について従来説が大きく修正されることになった。私がとくに興味深く思ったのは、その頃、すなわち440万年前に、大型サルの仲間にも初めて、いわば「男女共同参画」の生存戦略を選択したグループがあらわれたらしいことである。そしてこの生存戦略の差が、遂には人類と類人猿という種を決定的に分けたらしい。つまり男女共同参画を選んだサル種が、チンパンジーやゴリラを脇に押しやり、いまの世界を支配する人類に至ったように見える。私は女子大学に勤務しており、男女共同参画の文字が常に頭にある。その頭には、上の事実は十分に衝撃的であった。

類人猿もヒトも社会を作って生きる動物である。しかし社会の構造は両者でまるで異なる。今の類人猿では、オスは発達した大きな犬歯をもち、体格もメスに比べてずっと大きい。これはその社会構造、つまり強大なオスが群れとメスを支配するという構造に合っている。現生人類では犬歯に男女差はない。そしてラミダス猿人も、現生人類と同様に犬歯はほとんど発達していない。男女の体格差もきわめて小さかった。この身体特徴は、人類がその最も初期から、現代人と同じように、男性と女性がペアで助け合って生活する社会構造を生存戦略としたことを示唆するという。

上述した人の進化のシナリオは、主として人類の形態(化石)に基づく。これはまた、身体形態の基礎となるDNAの変化(進化)を、暗黙のうちに前提としている。ところが一方で、最近訳書が発行された書物(Matt Ridley 著 "The Rational Optimist - How

Prosperity Evolves", 大田, 鍛原, 柴田訳「繁栄」, 中央精版印刷社, 2010)では、現生人類10万年の進化の歴史をかなり異なる見地から説明している。この訳書は500ページを超える大著であり、およそ単純には要点をまとめ難い。しかし人類文化の面から眺めると、過去10万年の現生人類の進化は専ら、「人々がアイデアを交換し、組み合わせ、蓄積を始めた」ことによるという。この活動は個人間でも、異なるグループに属する集団間でも行われ、そこで初めて集団知や分業が根付き、またそれが文化として継承・伝播されるようになったという。ネアンデルタール人は現生人類と形態的にはほとんど変わらないが、彼らの遺跡にはそのような痕跡が全くない。彼らは現生人類と数万年の間共存し接触したにもかかわらず、技術上の進歩や展開を行うことなく2~3万年前に滅びた。この事実は、アイデア交換などの習性や能力について、彼らと現生人類との間に何か根本的な差異があることを示唆するという。しかしそれがDNAレベルの変化とかわかるかどうかは不明である。

さて、最近の若者では男性より女性が元気だそうである。男性ならではの出番が少なくなり、自信をつける場面が減ったのも一因ではないか。昔は年末と言えど大掃除であった。思い出すと私も中学生の時分、母からおだてられて妙に張り切って力仕事をやった覚えがある。しかし今の職場では男女ともパソコンを相手にしている。大掃除では生きがいににならない。

誰でもが人の将来のことを思う。私は、これからは誰も経験したことがないような、面白い男女共同参画の社会が生まれるのではないかと考える。何しろ筆者らは、男女共同参画を生存戦略として400万年以上も進化してきた生物である。また個人やグループ間でアイデアの交換に長けた動物である。そして筆者らを取り巻くあらゆる課題を、とにかく解決してきた実績がある。これから、どのような新しい社会を、日本が世界に先駆けてどう作るか、筆者らの課題であり楽しみでもあろう。



高木 誠 Makoto TAKAGI

公立大学法人福岡女子大学理事長・学長
工学博士。
専門は分析化学, 分子機能化学。
E-mail: takagi@fww.ac.jp